

と「鄙」と同じく負のイメージを含む言葉である。その字義を根源とした「偏」は、副詞として使用される際に、公正ではない、期待外れなどといった負のニュアンスを持つ場合が多い」（注4）（二十七～二十八頁）として具体的に『白氏文集』『698 客中守義』の中の「畏老偏驚節」の用例及び『菅家文章』『38 停習彈琴』の「偏信琴書者資」の用例を挙げつつさらに、次のように言及する。

「詩文の中に使われる副詞「偏」を解釈する際は、和訓の「ひとへに」の語義に囚われず、その中にある負のニュアンスを注意深く読み取る必要がある。では、「立春」詩における「偏」はどういう「不正」を現しているのだろうか。結論から言うと、この「偏」は「事実と希望相反（事実と希望とが相反する）」という負のニュアンスを含んだ表現と考えられる。（中略）恐らく彼の本当の願いは、都にいて、天子の側で、臣下達と共にこの春の到来を祝い、詩臣としての勤めを果たすことであろう。その希望が叶わず、暦のみを頼りに春の到来を認識せざるを得ないという事象に直面した時の落胆を表すために、「偏」が用いられたのである。」（注4）

（二十八～二十九頁）

この隋氏の指摘する「偏」の語の副詞的用法を、道真の作品で検索すると、次の三作品がそれにあたると思われる。

▼この一つは、隋氏も指摘されているもの（注4）だが、「38 停習彈琴」の一句目にある「偏信琴書學者資（偏へに信ず 琴書は學者の資なると）」の用例である。

この句は詩題にあるように「琴を弾くことを習ふことを停む」つまり琴のレッスンを止め、菅家伝来の学問にだけ精を出すことを決意した作品の一句目にある。「偏信琴書學者資（偏に信ず 琴と書は學者の資なるを）」の